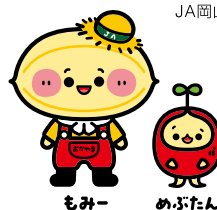
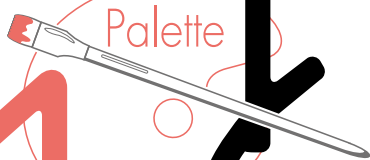


はれと



今月の表紙写真
わが家の伝統行事

詳しくは
P15へ

JA岡山合併25周年を迎えて ～合併からの歩みとこれからの農業～

農を担う
ブドウ農家 寒河 研治 さん
裳掛地区……10ページ

今月の折り込み 2026年3月号カタログショッピングチラシ ほか

JA岡山合併25周年を迎えて

合併からの歩みとこれからの農業

皆さまにお話を伺いました！

司会
営農部部長
いわたに ひで き
岩谷 秀樹JA岡山経営管理委員会会長
みやけ まさ ゆき
三宅 雅之昭和28年生まれ。
今年の抱負は「節目の年に、組合員のために新たな挑戦をする」。
令和7年6月から現職に就任。司会
まずは座談会開催にあたって、一言ずつ自己紹介をお願いします。

三宅会長

経営管理委員会会長の三宅でございます。合併25周年という大きな節目を迎え、改めて責任の重さを感じています。組合員のために、JA職員がいかに動き、前に出ていくかを今、一生懸命考えております。

皆さまと共に活動させていただけたらなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

山本常務

営農経済を担当しております山本です。本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。当組合の営農振興計画は作成当初から10年目を迎え、継続して3つの方針を掲げてきました。なかなか、生産者の皆さまのご期待に沿えるような結果ばかり残しているとは考えておりません。それぞれの立場からご意見やご要望をいただければと思います。本日はよろしくお願いします。

大園部長

備南地区で施設野菜を作っている大園です。営農振興計画を実現するには、若い人が積極的

に参加し、意見を出すことが大切だと思います。生産者、JA職員、行政が一体となって取り組まないと、これからの農業は成り立たないと感じています。生産者側からもしっかりと意見を言って、互いに良い未来を作っていきたいと思えます。よろしく願いいたします。

金居会長

私は蒙掛地区でブドウを栽培しております金居でございます。もうすぐ就農40年になります。若い頃は役員の中でも一番若手でしたが、今では上から数えた方が早い年齢になりました。農業は厳しい状況ですが、やりがいも大きいと日々感じています。それぞれが工夫しながらやっていけるように、若い人が後を継いでやってくれるような基盤づくりに取り組んでいます。今日はよろしく願いいたします。

司会

合併から25年経ちましたが、振り返って組合や地域農業にどのような変化や成果があったのかそれぞれお聞かせください。

三宅会長

合併によって組織が大きくなり、職員のレベルアップや、組合全体のやる気の向上など、良

山本常務

近年、備南地区では小玉スイカやニンニク等、いろんな品目を提案させていただいています。

大園部長

そうですね。特に施設栽培の小玉スイカは糖度が高く、とてもおいしいです。生産者の方々にぜひブランド化に取り組んでほしいですね。JA職員や行政とも連携して、もっと大きな産地に育ててほしいです。もちろん、生産者の中でも得意不得意があると思うので、上手な人がリーダーシップを発揮して、みんなで「ブランド化するぞー」という勢いが必要だと思います。地域全体で盛り上がっていきけるよう、これからもよろしく願いいたします。

金居会長

合併して25年、本当にあつという間でした。よく「JAが遠くなった」と言われますが、私は今のJA岡山の規模は農家にとってちょうど良い大きさだと思っています。確かに支所に行くことが減ったという声も聞きますが、職員の方々はよく動いてくれていますし、農家が声を上げれば一生懸命対応してくれまます。ただ、農家側も、自分たちからどんどん提案していくべきだと思います。JAに意見を伝え、実現していくことが大切です。産地の立て直しや若い人の受け入れ、技術力の向上など、次世代につながる取り組みを進めていきたいです。営農指導員もよくやってきていますが、古い産地はなかなか変わりにくいので、指導員が頻繁に現場に顔を出して話をするのが、産地の活性化につながると感じています。

い面がたくさんありました。

一方組織が大きくなったことで、地元とのつながりが薄くなってしまいう場面も出てきました。これは少し残念なことですが、今ある体制をどう強化し、さらに地域に根ざした活動を広げていくかが、これからの大きな課題だと思っています。

営農指導についても、「訪問が少ない」「技術が足りない」といった声をいただくことがあります。しかし、私は指導員だけでなく、組合員の皆さまにも「一緒に若手を育てていきましょう」とお願いしています。若い指導員がすぐに完璧な指導ができるわけではありません。お互いに学び合い、教え合うことで、組織全体のレベルアップにつながると信じています。25年の歩みを振り返ると、確実に良い循環が生まれてきたと実感しています。

山本常務

合併によって産地が大きくなり、スケールメリットを活かした販売や、統一ブランドの確立、購買事業でのコスト削減など、目に見える成果も出てきました。特に「ブランド」の商標登録や、全国でのPR活動は、産地全体の知名度向上に大きく貢献しています。

一方、生産現場では資材や経費の高騰、生産者

ブドウの品種についても、25年前はピオーネが最盛期でしたが、今はシャインマスカットなど新しい品種も増え、ブドウ産地として絶好調です。これからも技術を磨き、消費者に喜ばれる良いものを作り続けていきたいと思っています。

山本常務

生産者の皆さまの意見や要望については、各営農センターに4〜5名ずつTAC指導員を配置し、現場の声を直接聞くようにしています。月に1回はTACリーダー会議を開き、本所に要望等を集めていますが、まだ十分に意見が上がってきていないのが現状です。いただいた要望には一つ一つ丁寧に対応していきたいですし、今後はさらにTAC指導員が現場に足を運び、生産者の声をしっかりと本所に届けるよう指示していきます。

また、管内のぶどう部会では、若い新規就農者が増えています。行政やJA職員も就農相談会に参加し、情報を集めながら部会に新しい人を迎え入れる体制を整えています。これからも新規就農者が一人でも多く農業にチャレンジできるよう、サポートしていきたいです。

三宅会長

やはり、職員が現場に顔を出すだけでも、農家の皆さまと顔なじみになり、自然と会話が生まれます。そうしたやり取りの中で、職員も成長できると思いますね。

金居会長

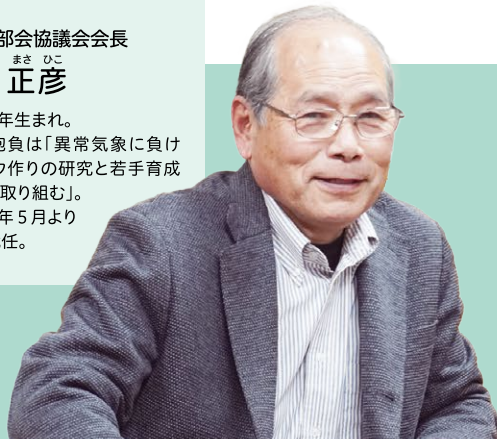
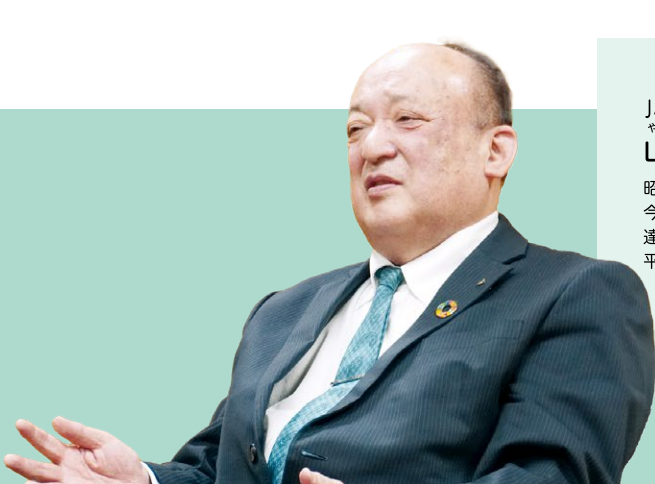
本場にその通りですね。職員のレベルアップはとても大切です。机の上の勉強も必要ですが、現場での経験が合わさることで、オールマ

司会
三宅会長と山本常務のこれまでの振り返りを踏まえ、現在の組合の役割と地域農業が抱える課題についてお伺いします。

大園部長

私は、合併するかしなかった時期に新規就農しました。当時は資材も安く、農業を始めやすい環境だったと今振り返って思います。しかし、ここ数年で資材や経費がどんどん高くなり、産地全体の元気がなくなってきたのを感じています。「合併して何が良かったのか」と聞かれると、正直私の地域ではまだ大きなメリットを実感できていません。

野菜の売り上げが落ちているという部分で言えば、農業経営を見てもらうとか、JA側から何か提案してもらえたらと私は思っています。生産者の方々にJAが何をやっているか、もっと知ってもらいたいですね。

JA岡山青壮年部部長
おお その なり ゆき
大園 幸幸昭和55年生まれ。
今年の抱負は「若手の参加と趣味を通じた交流で、活気ある青壮年部と営農の未来をつくる」。
令和6年4月より現職に就任。岡山芸部会協議会会長
かな い まさ ひこ
金居 正彦昭和32年生まれ。
今年の抱負は「異常気象に負けず、ブドウ作りの研究と若手育成に全力で取り組む」。
平成30年5月より現職に就任。JA岡山常務理事(営農経済担当)
やま もと いたる
山本 到昭和34年生まれ。
今年の抱負は「組織一丸で目標達成に向けて成果を追求する」。
平成30年8月より現職に就任。JA岡山経営管理委員会会長
みやけ まさ ゆき
三宅 雅之昭和28年生まれ。
今年の抱負は「節目の年に、組合員のために新たな挑戦をする」。
令和7年6月から現職に就任。

J A岡山合併25周年を迎えて

～ 合併からの歩みとこれからの農業 ～



イテイナーな人材になれると思います。分からないことはどんどん聞いて、現場で学んでほしいです。

山本常務

現在、7つの営農センターに32名のTAC指導員がいます。若い職員も増えてきました。最初は分からないことも多いですが、3年で一人前になってほしいという思いで育成しています。

司会

さて、今年度から新たに始まった営農振興計画について、初年度を終えての手応えや課題、そして今後の展望についてお聞かせください。

山本常務

まず米についてですが、長年の課題だった「ヒノヒカリ」の代替品種として、「つやきりり」という品種の普及に力を入れています。ここ数年、夏場の猛暑で「ヒノヒカリ」は品質が落ち、一等米の比率が大きく下がっていました。今年度は「つやきりり」を約10ヘクタールで栽培し、95%が一等米という好成績でした。来年度は200ヘクタールまで拡大予定で、今後も普及を進めていきます。

集荷量がまとまらないう市場での交渉力も弱くなりますし、有利販売も難しくなります。ぜひ全量JA出荷をお願いいたします。

また、カキ殻を活用した環境循環型農業で育てた「里海米」は、今年度目標1万6千俵に対し、実績2万7千俵となりました。次年度も引き続き推進してまいります。

金居会長

毎回素晴らしい計画を立てていただけていますが、もっと掘り下げて、作物ごとに生産者を集めて、例え

司会

皆さまが考える農業の未来や、組合員へのメッセージをお願いします。

三宅会長

全体の方向性を示すのは私の役目ですが、現場のJA職員には、生産者一人ひとりと話をして、目的や目標を一緒に作り上げてほしいと考えています。

例えば、職員が現場で「今年の野菜の売上はどれくらいですか?」としっかりコミュニケーションを取る。そうした中で「今年は良かった」「去年はこうだったから、今年はこうしよう」と数字の目標を持って話し合える場面を増やしてもらいたいですね。積極的に関わることで新しい挑戦を生み出し、みんなで目標を共有しながら進んでいける、そんな組織にしていきたいと思っています。

大園部長

現在は、若い世代や部会出荷者をはじめ、さまざまな生産者がいらつやいます。これからJAとよりよい関係を築いていくには、JAのことをもっと理解しないといけません。そのためには青壮年部に加わってもらい、JAの事業や農業以外の活動にも一緒に参加して、幅広く交流していきたいです。

金居会長

少し大きな話になりますが、今回「令和の米騒動」があり、食の大切さを改めて感じました。JAはみんなの食を守っている、農家はみんなの食べるものを作っているという意識を、生産者も職員ももっと強く持つべきだと思います。これからいつ食料危機が起こるか分かりません。だからこそ「食べる」ことが「一番大事」ということを前面に出して、JAも生産者も、みんなの食を守る存在であることをもっと強くアピールしていくべきだと思います。

ばブドウならブドウの振興計画をみんなで共有する場が必要だと思っています。管内には各地に産地がありますが、そうした横のつながりをしっかり作れば、産地全体が一体となって強くなれるはずです。

個々の考えで動いているだけでは成果が上がりにくいので、ブドウならブドウ、ナスならナスと、作物ごとに営農振興計画の方向性を明確に伝え、意識を統一して取り組むことが大切だと感じました。

山本常務

確かに、各営農センターで計画は策定していますが、作物ごとの全体像や横のつながりは十分ではないかもしれません。今後は、作物ごとの連携や情報共有も強化していきたいと思っています。

司会

「地域農業の活性化」として重要な役割でもある、直売所についてはいかがでしょうか。

山本常務

はなやか中央店では、売り場面積を拡大し、鮮魚や精肉コーナーのレイアウトも変更して、さらなる集客力アップを目指しています。今年度は米の販売も好調で、過去最高の販売実績となる見込みです。また、他店舗においても順調な販売が続いています。出荷会員の皆さまにも、年齢を問わず新しい作物に挑戦していただきたいです。定期的な栽培講習会も開催していますので、ぜひ参加していただき、活気ある店舗づくり、地産地消の強化につなげていきたいと思っています。

三宅会長

直売所は私の専門分野でもあり、非常に期待しています。

山本常務

近年、農業を取り巻く環境は大きく変化しています。今後さらに加速していくでしょう。身近な例で言えば、スマート農業の進展です。5年前は試験的にドローンを導入していましたが、今では全国的に普及しています。AIや収穫ロボットなどの技術もどんどん実用化が進んでいます。JAでもスマート農業の一環として米麦においてザルビオ(栽培管理システム)を活用し、品質向上と収量増大を目指した実証試験に取り組んでいます。一方で、生産から販売、営農指導、資材の購買までを一体的に取り組めるのは、国内ではJAだけです。このJAの強みをさらに強化していく必要があると確信しています。

また、国際競争や気候変動など、世界的な問題も深刻化しています。これからは日本だけでなく、世界的に食糧難の時代が来てもおかしくないと感じています。こうした中で、JAも生産者・青壮年部・女性部の皆さまと一体となり、地域農業をしっかり守り支えていく必要があります。私は、間違いなく「農業の時代」が来ていると感じています。今まで以上にJAがリーダーシップを発揮し、地域農業の発展に向けて、役員全員で取り組んでいきたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。

三宅会長

今日は本当に貴重なご意見をたくさんいただき、素晴らしい会になったと思います。皆さまがおっしゃったこと、私も全く同感です。改めて、皆さまと力を合わせて取り組むことの大切さを実感しています。協同組合とは何か、その本質を組合を支えるすべての方が理解し、力を合わせて組合のために取り組んでいくことが大切です。私自身も、これからもその思いを持って、できる限り努力していきたいと思っています。

組合員は5万3千人弱いますが、全員が農業をしているわけではありません。何らかの形で土や農業に関わっている方はたくさんいらつやいます。よく皆さまは「自分のことを「高齢」と言われますが、誰しも年を取っていくものです。私は、むしろ「年を取ったからこそもうひと頑張りしてほしい」とお伝えしたいです。そのためにも皆さまがさらに力を発揮できるよう直売所の強化に力を入れることが今年の私の大きな挑戦です。本心に熱い思いを持って取り組んでいます。

大園部長

私も直売所に出荷していますが、お客様からのJAへの信頼を強く感じます。直売所はまさにJA岡山の「顔」であり、まだまだ伸びしろがあると確信しています。

三宅会長

消費者の皆さまは直売所をしっかり支持してくれています。量販店とは違う、特別な信頼関係があります。作る人と買う人のパイプ役として、直売所の役割はとても大きい。今後もこのつながりをさらに太くしていきたいですね。

大園部長

以前は直売所や部会に出荷せず、自分で野菜を売り歩いてきた時期もありました。その頃は「直売所でナスが安く売られると市場価格も下がる」といった話を聞いたこともありましたが、実際に直売所に出荷してみると、そこまで安いわけでもなく、市場への影響も思ったほどではないと感じています。今は、生産者自身がトレンドや消費者の動向にしっかりアンテナを張っていくことが大切だと思います。また、JA職員と一緒に頑張っていくことが、これからの農業には必要だと実感しています。ぜひ、これからもよろしく申し上げます。

司会

本日は貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。これをもちまして本日の座談会を締めくくらせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。





「今年も新品種に挑戦する」と意気込みを話す寒河さん

もともと祖母がブドウ農家を営んでおり、父が後を継いだ際に、米やミカン、種馬鈴薯の栽培も始めました。私も

―就農したきっかけは

自分のペースで心地よく仕事ができる農業

1月29日、裳掛地区の寒河研治さんにお話を伺いました。

―農業を始めてからは
祖母がブドウを作っていた頃は、主にピオーネを栽培していました。私が引き継いだからはハウスを増やし、ピオーネに加えてシャインマスカット、オーロラブラック、クインシーナ、マイハートの5種類を、約70坪のハウスで育てています。マイハートは自分で新品種を検索し、興味を持って育て始めた品種です。新しい品種を調べて栽培にチャレンジすることにやりがい

その流れを受け継ぎ、現在は母にも収穫作業などを手伝ってもらいながら、父と一緒に農作業に励んでいます。
私が本格的に農業を始めたのは32歳の頃で、それまでは東京で警備会社に勤めていました。30歳を前に勤務地が岡山になり、実家へ戻ってきました。その後、再び転勤の話が持ち上がった時に、「この機会に実家で農業を継ごう」と決意しました。誰かに指示をしたりされたりするような上下関係のある職場よりも、自分のリズムで働ける自然体でいられる農業の環境が自分には合っていると感じています。

感じており、この冬にもさらに新品種の栽培を始めようと思っています。
―苦労すること・楽しいこと
やはり夏の暑さは厳しいですが、農作業自体はあまり苦になりません。自分が育てたブドウを食べて「おいしい」と喜んでいただけるのは、とても嬉しいことです。ただ最近では、「もつ」とおいしいブドウを作らなくては！というプレッシャーも感じるようになりました。そのためにも、基本を大切にしながら丁寧に作業を続けていきたいと思っています。

新品種への挑戦を続けたい

―今後の抱負は

今後新品種の栽培に積極的にチャレンジし、栽培する品種を増やしていきたいです。また、誰が食べても「おいしい」と感じてもらえる、高品質なブドウ作りにこれからも力を入れていきたいと思っています。

聞き手…JA岡山広報担当



メンテナンスのような細かな作業も苦にならないそう



次の栽培に向けてせん定する寒河さん

自分らしい農業で、新品種に挑戦 おいしいブドウ作り



農
を担う
vol.307

寒河 研治さん

裳掛地区：ブドウ農家

「かんかわ けんじ」昭和53年生まれ。

㊦ ぶどう部会（裳掛支部）に所属。父・母と3人で農業を営んでいる。ブドウ、米、ミカン、種馬鈴薯を栽培。「『出来るか、出来ないか』ではなく、『やる!!』」をモットーにしている。



野菜（サトイモ）

夏場の
土壌水分が大事



営農部指導課
岸野 真美

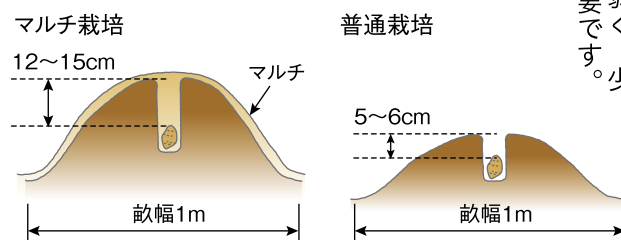
サトイモは東南アジア原産で、高温を好み最低発芽温度は15℃、生育適温は25℃、30℃で、地上部は霜に当たると枯れます。イモの貯蔵温度は7℃以下で、6℃以下で腐敗します。土質に対する適応性は広く作りやすい野菜ですが、連作には弱く、少なくとも3～4年の輪作が必要です。

資料1 サトイモの作型

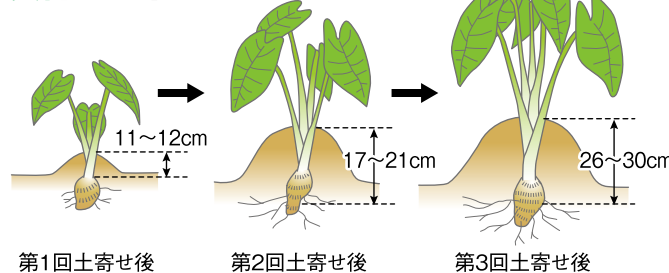
作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
マルチ				○						■	■	
露路					○							■

○ 植え付け ■ 収穫 (マ) マルチ被覆

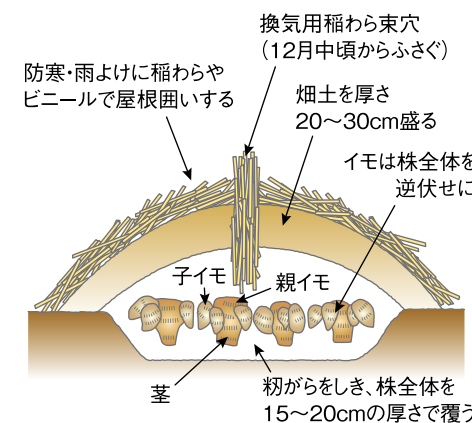
資料2 畝立て・植え付け



資料3 土寄せ



資料4 穴埋め貯蔵法



●栽培管理
・芽かき
種イモから2本以上発芽した場合、親イモが2つになり子イモの肥大が悪くなるので、芽かきをして1本立にします。

●植え付け
露地栽培では、4月末から5月上旬の気候が安定し地温が15℃以上になる頃に植えます。マルチ栽培では、マルチが地温を上げる効果があるので、4月中旬から植え付けることができます。早生品種をマルチ栽培すると収穫時期を早めることができます(資料1)。株間は、35×40cmの1条植えとし、畝の中央部に溝を掘り、種イモを植え付け、5×6cmの覆土をします。マルチ栽培の場合は、15cm程度の深さに植え付けます(資料2)。

●種イモの準備
種イモは、病害虫の被害やキズがなく、頂芽が健全で丸みがあった子イモ(孫イモ)で1個60×70mmのイモを選びます。種イモは大きいほど初期生育が良く多収となります。10平方メートルあたり15×2kgを準備します。

●追肥と土寄せ(資料3)
追肥は土寄せのタイミングで行います。畝の肩に施肥し、軽く中耕した後に土寄せを行います。10平方メートルあたりJA岡山専用有機肥料等を400gずつ、3回施用します。
1回目の土寄せは本葉が2～3枚の頃、2回目は、6月中旬頃に行います。3回目は、7月上旬頃に行います。最終的に畝の高さが20cm以上になるようにします。一度にたくさん土寄せすると、子イモの数が少なく、変形したイモになりやすくなります。梅雨明けまでは土寄せ作業を終わるようにはします。
マルチ栽培の場合、土寄せはできませんが、マルチの下に追肥を行います。マルチをめくるか、マルチに穴を開け、畝の肩辺りに施肥を行います。
●灌水と敷きワラ
収量と品質を大きく左右するのは土壌水分です。子イモは7月中旬以降から8～9月にかけて急速に肥大するので、この時期は乾燥させないように注意して灌水を行います。マルチ栽培でも、マルチ内への水分を確認しながら灌水を行います。
また、3回目の土寄せの後に敷きワラを行い、乾燥防止と夏の高温対策をしましょう。

●収穫と貯蔵
収穫は、天気が良く土壌が乾燥気味の時に、株ごと掘り起こします。取った後に、株ごと掘り起こします。サトイモは6℃以上に保てば貯蔵できます。貯蔵する場合は、子イモは親イモに付けたまま、株ごと逆さにし、排水良好な場所を選び、穴埋め貯蔵をします(資料4)。

花き（ペゴニア）

ちよつと気難しい
女王を咲かせる



営農部指導課
中川 雄一

●豪華に咲き誇る球根ペゴニア
鉢花の女王ともよばれる球根ペゴニア。ペゴニアで一番身近なのは花壇でおなじみのペゴニアセンプフローレンス、木立ペゴニアなどとともに、日本庭園でも見かける秋海棠(シユウカイドウ)の仲間です。
その中でも特に豪華な花を咲かせることから「女王」と呼ばれ、それを目玉にした観光施設もあります。
栽培の難易度はかなり高め、その開花を目指すには：チャレンジ！(資料5)

●原産地や特性など
ペルーやボリビアなど、アンデス山脈の高地に自生していた原種から交配を重ねて、現在の品種が生まれました。夏も涼しい地域のため、日本の高温多湿な夏は苦手です。(専用の栽培施設では25℃以下で空調管理しているといえます)。また、寒い冬は葉が枯れて球根だけになります。生育に適した温度も15℃、25℃、それが維持できれば初夏から秋まで続けて咲かせることができますが、やがて、日が短くなると次第に休眠に向かいます。
長期間花が咲くように品種改良を重ねていても、梅雨明けから盛夏は難しく、なんとか耐え抜いて、涼しい秋の開花を目指します。
花言葉は「幸福な日々」「親切」等で、葉っぱの形が左右非対称なところから付いた「片思い」もあります。

資料5 豪華に咲き誇る球根ペゴニア(木立タイプ(中)とハンギングタイプ(右)があります)



左は花壇でよく見る小輪で丈夫なセンプフローレンス
球根ペゴニアの雄花は、大きいと10cmほどもある八重大輪

資料6 球根ペゴニアの年間生育パターン

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
やや早播き	■	▲	▼							
適温期播き		■	▲	▼						
										■
										■

■は種期 ▲ポット上げ ▼鉢上げ・定植 ■開花 ■施肥
盛夏期の開花はととてもむずかしく、秋涼しくなったからの鑑賞。フォーチュンは日長と温度を確保した室内なら冬にかけても開花が続きます。

資料7 豪華な雄花と小ぶりの雌花、摘芯の位置



雌花は蕾のうちに摘み取ります。摘芯は最上段の花茎の上で。

●冬越し
休眠に向かった株は徐々に水を控え、乾燥した状態で鉢のまま雨の当たらない玄関などに置いておきます。冬の低温に遭った後、春に灌水開始すると芽が伸びて再び開花します。この時、2本以上芽が出てきたら、強いのを1本残して摘み取ります。

●長く楽しむ
「フォーチュン」は冬まで開花が続くといえます。
球根ペゴニアは14時間以上の日長がないと、秋、気温の低下とともに地上部が枯れて休眠するので、開花を継続させるには、14時間以上の長日環境に置く必要があります。フォーチュンは12時間以上で開花するとされ、照明のあるところで温度も保てばより長期間楽しめるようです。

●小さく育てる
も小さくなります。花が出た上の節で茎を切り戻しておくと、うまくいけば球根から新芽が伸びてきます。開花中の茎が弱ってきたら、これを切って立て直します。厳しい夏を無事に乗り越えたら、秋の開花が期待できます。

果樹（カンキツ類）

3月はカンキツ類の植え付けの時期です



営農部指導課 祇園 将人

3月に入れば寒さも和らいで休んでいた樹木も目を覚ましてきます。今月の作業としては、常緑樹の植え付け、カンキツ類のせん定、ビワの摘果、ブドウのビニール被覆などがあります。今月はカンキツ類の植え付けと、せん定について記述いたしますので参考にしてください。

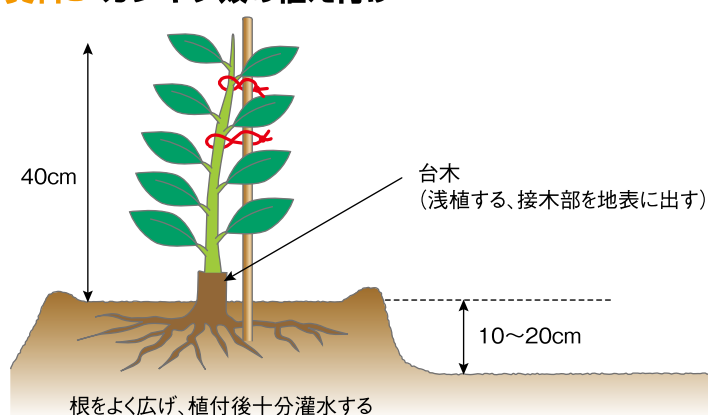
●カンキツ類の植え付け

植え付けは、3月中下旬が適期となります。樹と樹の間隔は、キンカン・スダチ等で3畝、極早生・早生温州みかん等では4畝、中生・晩生温州みかん・甘夏・不知火（デコポン）等では5畝、八朔・文旦・晩白柚等では、6畝とし、旺盛な品種ほど間隔を大きくとりまします。間隔をあけていると作業スペース、日当たり・風通しがよく、防除も散布ムラがでにくくなります。また、品種によってはトゲのある品種もあるので十分に間隔をあげるようにしましょう。

植える場所ですが、温州みかんのそばに八朔等晩柑類を植えると温州みかに種が入りやすくなります。場所があればなるべく離して植えましょう。

植え付け穴は直径1畝深さ50程度

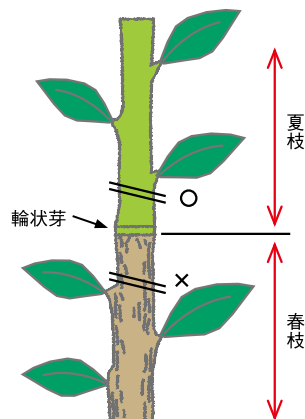
資料8 カンキツ類の植え付け



とし、掘り上げた土に完熟堆肥10、20を溶りん500、1石灰1、2を混和し、土が落ち着いても植え付け位置が低くならないよう、20程度の盛り土をします。この作業を前もって1カ月位前に行っておきます。

苗木が届いたら根を乾かさないうに保管し、植え付け前に半日程度水を貯めたバケツ等に根を浸けて水を吸わせまします。植え付け時には接ぎ木部位から30、40ほど上まで切って、深植えにならないように（接ぎ木部分が地表に出るように）根を広げて定植まします（資料8）。植え付け後は活着するまで、乾燥には十分注意してく

資料9 カンキツ類のせん定



予備枝のとり方
※輪状芽を残してせん定する



●カンキツ類の整枝せん定

せん定は3月中下旬頃から行います。栽培面積が多く、早くからせん定したい場合には、寒さに強い順にせん定しましょう。（晩生↓中生↓早生↓極早生温州）同じ品種でも、昨午なりが少なかった樹は早めに、多くなつた樹は遅めにせん定しましょう。

カンキツは枝が伸びるのが春枝・夏枝・秋枝と3回伸びるタイミングがあります。（どの枝も3回伸びるわけではありません）伸びる時期が違ふと枝の色が少し異なり、その境目に

せん定は夏秋梢などの徒長枝や込み合った部分や地面に垂れそうな枝を切除まします。同時に枯れ枝がある場合には切除まします。枯れ枝は黒点病等の発生源になるのでせん定時以外にも気が付いたら切り取りまします。

ださい。降雨がない場合は定期的に灌水し、根の活着を促進まします。なお、植え付けから2、3年は果実を摘果し樹作りに専念ましましょう。この期間に結実させると、樹の拡大が遅れる要因となります。みかんは、数個結実するだけでは八朔のように外の皮も中の皮も厚くなり、大味なものになってまします。樹が大きくなるまでは果実を結実させないようましましょう。

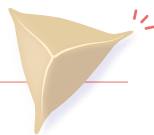
輪状芽という小さな芽が多く集まつたコブができます（資料9）。コブを残してせん定すると輪状芽が春芽として発芽し、翌年の収穫が見込まれまします。コブを切除すると強い枝が発生し、よく伸びましますが果実はなかなかりまません。果実を収穫したい場所にはコブを残してせん定。樹勢が弱いこの枝を強く伸ばしたい場合は、コブを取りまします。

カンキツも収量が多い表年、収量の少ない裏年と収量が安定しにくい品目です。表年の場合は果実が多くなつて枝があまり伸びていないので弱めのせん定、裏年の場合は果実が少なかったで枝がよく伸びているので強めにせん定を行うと、裏年表年の格差が少しは正まれます。



作り方

- ① ジャガイモの皮をむき、大きめの角切りにする。ラップをして500Wで6～7分、柔らかくなるまで加熱する。ショウガは皮をむき、すりおろす。
- ② ジャガイモをチャック付きの保存袋に入れ、はんぺん、ショウガ、Aを加えて口を閉じてよく揉む。茹で枝豆を追加したら、つぶれないようにもんで軽く混ぜる。
- ③ 餃子の皮のふちにぐるりと水をつけ、真ん中に②の具をのせ、Yの字になるよう口をしっかりとじる。
- ④ 170℃の油できつね色になるまで揚げ、冷ましたら完成！



JA 共済の地域貢献活動

©2017 JA-KYOSAI

JA岡山農産物レシピ

ジャガイモと はんぺんで ヘルシーサモサ

ポイント

おやつやちょっとした軽食にも。包みにくい場合は、具を少なめに
してチャレンジしてみてください！



材料 (約20個分)

ジャガイモ	2個
ショウガ	1/2片
はんぺん	1枚(約100g)
茹で枝豆(またはグリーンピース)	20～30g
餃子の皮	約20枚
サラダ油	適量
●A	
カレー粉	小さじ1
醤油(濃口)	小さじ1/2
塩・こしょう	少々

anniversary
25th

地域に芽吹いた
25年の軌跡

25年の軌跡を語り合って



令和7年7月、JA岡山は合併から25周年という大きな節目を迎えました。それに伴い、広報誌「ばれっと」では7月号より編集後記にて「地域に芽吹いた25年の軌跡」と題し、これまでの歩みや思い出を振り返ってきました。3月号では特集記事として、役職員ならびに関係者による座談会を開催し、これまでの歩みを振り返るとともに、組合の役割や農業の現状・課題、そしてこれからの25年に向けた展望について語っていただきました。

この25年の間に世の中は大きく変化し、農業を取り巻く環境も大きく様変わりしました。現代ではその変化がこれまで以上にスピーディーに、そして大きく進んでいるように感じます。

こうした時代の流れを、農家の皆さまも役職員も肌で感じていることと思います。JA役職員だけ、あるいは農家だけが意識を変えるのではなく、協同組合として相互に助け合いながら、ともに成長していける関係を築いていこうという思いが強く感じられた座談会でした。

4月号からは、再び「編集後記あぐろぐらむ」をお届けいたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

広報担当 馬場 郁衣



各種媒体で情報発信



オンラインショップ
はなやか
オンライン



Instagram



JAOKAYAMA.OFFICIAL



広報誌「ばれっと」
意味

水彩画や油絵を描くときに絵具をまぜあわせて色をつくる板のこと。
特色ある地域の様々な情報をうまく調和させながら、地域と共に歩むという願いがこめられています。